近代外交史三つの視点への試論　(二)

――宗教改革…(1)――一神教とローマ・日本の神々

北島平一郎

目次

はしがき
序
① 宗教改革
② 宗教と政治
③ 宗教思惟理論
④ 一神教と多神教
一、ローマと宗教
ローマの建国
ローマの神々
ローマの宗教とギリシアの宗教
二、ローマの神々と日本の神々
自然崇拝
原始の祈り
日本の類似神

はしがき

前稿にひきつづき本拙稿では、与題に従い、宗教改革の問題にすすむ。この場合問題となるのは、「宗教」というテーマである。普通、宗教問題は、宗教学、神学、宗教社会学等々にまかし、政治学では、これを正面からのテーマとしないことが多い。それは宗教問題は、ルネッサンス以降は、政治の表面にあらわれないのでこれをとりあげることは大きなアナクロニズムであるという認識。宗教は個人的感情的、絶対的な心の問題で、科学の対象、特に社会科学の対象とはなりにくい、等の認識から右述の様な状況になっていると考えられる。しかし宗教改革といえば、ことは宗教であるから、これを放置して進むことは出来ないであろう。それに宗教と政治は緊密に結びついていてその表裏一体をなしているといっても過言ではないのでこれをさけて通ることはまた出来ないであろう。少くとも宗教改革で改革さるべきは宗教であるキリスト教であるからそのキリスト教が、ローマで興り、最初異端であったものが、何故ローマの国教となった（国教化とは、コンスタンチン一世大帝（Emperor Constantine I the Great）の時から皇帝がこの宗教の帰依者となった謂であり、それは、政治的個人的動機からと説明されるが以後各皇帝はキリスト教の帰依者であり、疵護者であった）のであるかは或程度の探究を必要とすることは言うまでもなかろう。そして以来宗教改革にいたるキリスト教の歴史もその概略の知識は、これもまた是非必要であろう。こういった考えから本拙稿では、大膽にも種々のタブーを犯して宗教問題に論をすすめることから宗教改革問題の解明にすすみたいのである。これに対する大方の御叱声を乞い上げたい。

序

①　宗教改革

前稿で十字軍から地理的世界発見について筆者なりにのべた。イスラムの侵勢に対し、西欧キリスト教圏が反発し、両者の戦いの結果、西欧世界が敗退し、ビザンチン帝国が亡んだ。一四五三年の事であった。この為、中近東はオットマン・トルコにその版図を占められ、西欧は東方への交通路を退たれ、その意味で孤立した。これを打破する為に、奔騰した西欧のエネルギーが、海洋に向ってあふれ、ここから地理的世界発見という世界大陸征覇事業が興起した。これが、ヘンリー航海王子（Henry the Navigator）を生み、ディアス（Bartolomeu Dias de Novais）を生み、バスコ・ダ・ガマ（Gama, Vasco Da）、マゼラン（Magellan, Ferdinand）を生んだ。希望峰の廻航は一四九七年七月二二日に達成された。ビザンチン帝国の滅亡をへだつ四三年であった。こうして西欧は海洋から東方へ到達することが出来る様になり、世界各大陸が西欧に発見されて世界的通交の外延が形成された。世界が西欧に結びあわされた。ここから当然希望に満ちた新らしい発展への展望が開けた。科学の発達が精神界の闇をふき払い、ルネッサンスの文化が開けた。そしてそこから宗教改革の大波が起る。そして当然拙稿も宗教改革の叙述に進まなければならない。宗教改革は二つの大きな面をもっていた。㈠キリスト教と教会の腐敗堕落の匡正、㈡国教の確定と再編成。これらは二つ乍ら国家生活にとって大問題であった。前者は「免罪符」（Indulgence, 生前罪を犯した者が死後錬獄（Purgatory）で受ける苦難を軽減するために教会に資材を寄進して法王から免罪（符）を受けた。この弊害が宗教改革（Reformation）の導火線となった[1]）の発売にみられる金銭的また性的な腐敗とその改革運動であり、後者は、

それまでカソリシズムの一枚岩であったキリスト教がプロテスタンチズム（Protestantism, ルッター、カルビン等の流れをくむキリスト教徒でカソリックの様に法王（Pope）を教会の最高支配者と認めない）とこの世界を両分するに至って、宗教と政治の問題が俄然表面に出、国家の独立運動、ナショナリズムの問題と共に各国王の王権の確立問題とも抱合して夫々の国が国教を再決定し、それに従ってローマからの分離、反対派、異教の弾圧等、激烈な分離、整合運動が起り、これが主として欧州の天地にふき荒れた。これが宗教改革であるけれど拙稿は前稿「序」にのべた目標に従って叙述をそれなりに展開したいものであるからここに宗教改革の問題をとりあげねばならない。しかしこの問題の解明の為には、中心となるキリスト教が西欧の国々に国教となった経緯、ひいては、古代ローマに於て異端とされたそれが、古代ローマの神々をのり越えてローマの国教となった経緯の解明が必要である。ことは厖大、複雑であるけれど、これに筆者なりにとり組まねばならない。そこで十字軍、地理的世界発見とつづいた前稿をここで一旦また古代のローマにふりもどすのである。迂遠な話であるけれどもここでこの意図についての大方の御叱正を乞い上げたい。

宗教改革の問題にすすむに当ってこれについて大きな前提がまずそれなりに解明されなければならない。それは二つあり、その一は、宗教と政治（国家）のそれであり、今一つは、その宗教の中で何故キリスト教がローマの国教となり得たかという問題である。

②　宗教と政治

宗教と政治はきってもきれない関係にある。それは無神論者を除いて宗教は万人の心の感情の一つであるからである。人と政治がきっても切れない関係にある如く宗教と政治はきってもきれない関係にある。[2] 政党政治時代になっても宗派名を冠した政治政党は種々あり、またドイツのかつての中央党やキリスト教党の如く大略いって宗教党そのものもある。[3] しかし宗教が夫々の国に定着している限りは、政治と宗教は、さしたる問題を起さない。宗教は太陽や水の如く政治と共存して波乱はない。ただ一つの宗教を国家が戒律としてなり国民に守らせなければならない場合には、それは大きな政治問題となっている。そして尚、問題はその変革の時期である。新宗教と旧宗教が相対立し争う場合、国家が何れかの宗教を国教とする場合、それを強制する場合等々に宗教は国政問題となって国家に大波乱が起る。それがキリスト教がローマに国教となった場合、十字軍の場合、宗教改革の場合等である。日本にも廃仏毀釈の大きな政治変革があった。

丁度ローマ時代、ビザンチン帝国が栄えていた古代、奈良朝時代の日本では、宗教の国家的統一が行われた。即ち持統天皇から元明、元正両帝に及ぶ四代三十四年間（六八七年から七二〇年）に日本各地の各神道宗派、各神社が天照皇大神を頂点とする国家神道に統一編成され、これを立証するものとして古事記（七一二年）、日本書紀（七二〇年）が夫々天皇に上られた。天照皇大神は、実はその時迄、さして重要な神ではなく、高皇産霊神（タカミムスビノカミ）が、天の祖神、日本第一等神の天御中主神（アメノミナカヌシ）の直流の大神として日本を司る神とされていたのを、持統天皇のとき国家統一編成を強化する為、女帝であった天皇の本源として女神であった天照皇大神が表面に第一等の本源神としてあらわれてきたのであるという説がある。そしてそれを裏附ける為に古事記、日本書紀が天皇家の祖神として天照皇大神を位置づけ、その

下に日本の全神社を統一編成したというのである。即ち、日本の皇室が、天つ神の直流の子孫として存在しているという、これは勿論最も直接的説得的な王権神受説、というよりは寧ろもっとあらわな王神孫説であろう。天照皇大神がそのときまで男神であったが、この必要から女神とされた[4]という説もあるが、本文にのべる如く、古代の神々は、生殖生成の司としてほとんど女神であったし、これは日本の神々と同類型とされる古代ローマの神々もまたそうであったから天照皇大神は日の神、豊穣の神として女神であったと考えられる。またそれなればこそ天照皇大神は女帝の本源神とされる意義をもち得るであろう。神代から語りつがれた物語りを語り部の大安磨呂が口述し、これを稗田の阿礼が筆記して出来たという古事記、また日本書紀は、皇室の神々の物語りを伝承や祝詞、各地の風土記、そこでの言い伝え等を集大成して書き上げられたものであろう。賊は討つが、国譲りは、王化と徳化の末、和協の精神を以て行い、ここに日本全国が皇室の下に国家統一をとげたという物語りが、種々の矛盾を含み乍ら完成されたのである。何れにしろ宗教と政治の抱合性、表裏一体性はここにも明々白々である。

③　宗教思惟理論

宗教改革の目的となったキリスト教は、それがローマに於て異端から国教にかわるということが抑々の大事件である。この解明からキリスト教の本質と他宗教との比較が可能となる。それが全部ではなかろうが、甚だ重要である。このテーマは、しかし乍ら本拙稿の主要テーマの一つであるのでそれは後に譲ることとし、ここでは、宗教思惟理論と一神教と多神教の問題にふれる事とする。古代ローマでキリスト教が興ってきたときそこには種々の神々が存在した。それらの神々はギリシア神話から由来する神々であったが、自然崇拝に基づき、夫々の分野にわかれる支配をもっ

ていた。即ち春の神マーズ(Mars, ギリシア神話、以后希神・Ares)、穀物、野菜の神シリーズ(Ceres, 希神Demeter)、野菜園の守り神ビーナス(Venus, 希神Aphrodite)、大地の精テラス(Tellus)、森と智恵の神ミネルバ(Minerva, 希神Athene)等々である。古代の人々は、これらの神々に四季の移りかわり、自然のとどこおりなき運行と自然の恵みを懇願し、祈った。そしてその報いに夫々の祭りを以てその神恩を拝謝した。そこには宗教の思惟的理論はなかった。そこへ二千年を超えて変ることなき宗教思惟理論を有するキリスト教があらわれた。それは旧約聖書と新約聖書に集大成されていって今日でも尚かわらない。ここではじめてローマの人々は宗教思惟理論にふれたのである。そしてたとえば、一例をあげれば、古代の神々によって授けられる四季の恵みは、キリスト教によっては、神との契約となる。即ち鳥、獣、魚、野菜の種々は、神によってノア(Noah)に食物として与えられる契約となった。またノアに約束される再び洪水を起さないという言葉も神の契約となった。こうしてキリスト教思惟理論は、人々の合理的信仰の対象となっていったのである。それと共に古代ローマの神々は宗教性を持たないままとなっていった。その点古代ローマの神々と同類型とされる日本神道の神々は、今日に於ても古代と変らぬ尊崇と祭りを捧げられているのは、まことにめでたいことである。

このことは、キリスト教が日本に流入したときのことを考え合わせるとすこしくよく理解出来る様である。(5) キリスト教は日本に於て、最初政権に庇護され、安土や京都にセミナリョを開く程であったが、後これに疎外されてゆく。そのときキリスト教宗教思惟理論が対決したのは宗派としての仏教であった。神道は素通りしている。(6) キリスト教バイブルの教理と仏教のあの数百千万語に及ぶ教條とがぶつかったのである。勿論決着はつかず、双方宗論における自派の勝利を確信していたのであろうけれど、キリスト教宗教思惟理論のローマ、日本の神々に対する態度がここに明

瞭に示されていて、宗教思惟理論を持たない宗教は宗教としてそのレーゾンデートルを持たなかったとみるのは筆者のひがめであろうか。この故に古代ローマに於ては、宗教としてのキリスト教が定着していったとみるべきなのである。

④　一神教と多神教

さてここで、一神教と多神教の問題を代入すると、ことはより明瞭となる如くである。即ち一神を教條とする宗教と多神を教條とする宗教である。古代ローマの神々、日本の神々は勿論多神教であった。そしてキリスト教は一神教であった。一神を教條とする宗教は一神のみを尊崇し、他の神々はそれにとっては無である。多神を教條とする宗教は例えば日本の神々の如くそれは八百万大神々（ヤオヨロズのカミガミ）が存在し、夫々の司々に応じて機能する。もとより多神教も全く別の宗派の神を直ちに認めることは無いけれど、もともと多神であるからそこに他宗派の神々とも何時しか抱合し、併存する。この稀有な見事な実現は、日本の神道と仏教の併存であり、[7] いうなれば信仰に於ける相互補充関係である。一は、自然神と産大神を崇拝し、他は自己の家の祖先を崇拝する。プロテスタンチズムとカソリシズムを別々の二つの宗教とみることは可能であるか否かは大きな問題であろう。こうして一神を尊崇する宗教は多神が、仮にそして例え、その併存を許し認めても、それ自らは、それにとって他の神々、宗派は無に等しいのである。ここが問題であろう。こうして古代ローマの多数の神々は、一神教であるキリスト教にとっては無の存在となっていったと考えねばならないのである。ここに一神教と多神教、多神教と多神教の存在の問題がある（キリスト教の旧約聖書には次の一項がある。「すべての彫像、天・地・水のそれに似た一切を作ってはならない。それらに叩頭し、祈ってはならない。我、

汝の神（the Lord your God）は嫉妬深く、我をにくむ人々の子孫は罰せられ、我を愛し我が戒律を守る幾千の人々は慈悲を与えられる」）。

かくして叙上とくところから宗教改革を論ずる場合、宗教改革に於けるまず、キリスト教のローマでの勃興の問題に筆をすすめねばならないであろう。

(1) The Oxford Illustrated History of Christianity, ed. by John McManners, Oxford Univ. Press, 1990, pp. 244-45. この宗教的設定、宗教的処理は、欧州の宗教的地図が再編せられた同じ高い政治レベルで法王やプリンス達によってなされた。この処理の目的物は、地方的共同社会や個人等が関心ある人々や教会財産や、宗教的信仰や慣習であった。支配者達と同じ自己中心的なものであったが、またしかし熱望、信じやすさ、信心等にも動かされていた。例えばドミニカン僧、法王赦免状伝達者達は人々に次の様に教えた。金箱にペニーが投げいれられると浄罪界（地獄と天国の間にあって天国にゆく前に死者の霊魂が色々の苦難によってその罪を清められる所）から亡くなった祖父、母達の魂が救い出されるし、またそうした人達が人生の現世の罪（sin 宗教的な罪、神の掟に背く事）から救われる、と。

(2) ibid., pp. 70-71, 国教となったキリスト教とローマ帝国の関係。公的分野に於てキリスト教徒は、殆んど条件なしでローマ帝国の政治的社会的秩序と彼等自身を同一視していた。キリスト教とローマ帝国はお互いに補完していた。神の神意は、コンスタンチン（Constantine）帝によって実現された。アウガスタス（Augustus）は世界をローマ支配の下に、キリスト教を神の支配の下に統一した。そしてコンスタンチンは、原理的に全宇宙的であるキリスト教社会の中に二つの統一体を統合した。教会と帝国は一つの単一体に融合された。帝国は、天上の王国のイメージであり、その境界は、キリスト教世界の限界であった。皇帝は、世界の神権の代表であった。キリスト者皇帝達は、彼等の臣民をキリストのくびきの下にもちきたす神の代理者となった。

(3) State, Economy, and Society in Western Europe 1815-1975, ed. by Peter Flora & others, Volume I: The Grouth of Mass Democracies and Welfare States, St. James Press, 1983, pp. 155-89, オーストリア・キ

リスト教社会派党（Christian Social Party）1919-1930, ベルギー・カソリック党・一八四七―一九三九、反体制カソリック一覧表（Dissident Catholic Lists）・一九二一―二九・一九三六・一九五四・一九六一、キリスト教社会派党・一九四六―七四、デンマーク・キリスト教人民党・一九七三・七五、ドイツ・中央党・一九一九―三三、キリスト教民主連合（Christian Democratic Union）・一九四九―七二、イタリア・カソリック党・一九〇四―一三、キリスト教民主党・一九四六―七二、オランダ・カソリック人民党・一九四六―七二、カソリック民族党（Catholic National Party）・一九四六―七二、ローマカソリック党・一九七二、キリスト教歴史連合（Christian Historical Union）・一九六三―七二、英国・カソリック保守党・一八九六―一九七五、プロテスタント人民党・一八九六―一九七五等々。

（4）神道の本、源流の神々、天照大御神（アマテラスオオミカミ）、学習研究社、一九九二年、五一―五七頁。

（5）日本にはじめてキリスト教を伝えたのは、フランシス・ザビエル（Saint Francis Xavier, 1506-1552）であった（一五四九年八月十五日、はじめて鹿児島に到着。但し、聖徳太子の頃にある流派のキリスト教が日本に伝ったが何人もこれを理解しなかったという説もある）。彼はポルトガル人によってマラッカにともなわれていた日本人 anjiro と会い、日本の話をきいて日本行を決心し、日本の人々をキリスト教化する決心で二人のヂェスイットと三人の日本人（洗礼を受けていたキリスト教帰依者）と共に日本に渡った。この事が起ったのは、彼等が、Society of Jesus（Jesuits）から東南アジアに派遣されていたからであった。このヂェスイットの組織は Ignatius Loyola（St. Ignatius of Loyola）によってローマで創設された（一五四〇）ものでいわば反宗教改革のカソリック騎士団と云えた。ロヨラとザビエルはパリ大学の学友であった。この騎士団は法王 Paul Ⅲとポルトガル王 John Ⅲの庇護を受けていた。この騎士団は、㋑貧困、㋺純潔、㋩巡礼（イエルサレム）を守るべき三つの戒律とし①魂の浄化、②神の意思の発見、③キリストの導きによって創造主への奉仕に心と意思を捧げる、ことが目的であった。一方、当時東南アジアの東インド諸島（East Indies including India, Indochina, Malay）はポルトガル植民地帝国として栄え、その最盛期を迎えようとしていた。ザビエルは、最初この帝国の首都ゴアに派遣され、そこで人々や子供達の介護に当り、彼等の魂の救済につとめていたのであった。この事はジョン三世がポール三世にといて実現していた。「私が彼（anjiro）に尋ねた時」とザビエルは、日本行に当って本国に書き送っている。「私が彼と彼の国へ赴いたら、人々はキリスト教徒となるだろうか、と。これに対し彼は答えた。彼等はまず多くの質問を発し、そしてそれに私が如何に答えるか、またどれ程多くを知っているかを納得するまではそうならないだろう、

と。就中、彼等は、私が言明することと信じている事に私が如何に適合した生活を送るかを知りたがるだろう。若し私がこれらを実践し、彼等の満足する答えをなし、身をへりくだってつとめ、私の行動に何らやましい点が見出されず、そしてこれが六ケ月間続いたとすれば王、貴族、そして他のすべての思慮ある人々はキリスト教徒となるだろう。何とならば、日本人は、完全に理性の法則によって導かれる人々であるから、と。この日本人観は非常に興味深いものであるが、日本人と宗教との関係、その宗教観、倫理性がうかがわれて、はじめてキリスト教に対した日本人の心情態がそこはかとなくわかるものである。こうして日本にやってきたザビエルはその年から一五五一年九月迄日本にとどまり、九州を巡歴し、遂には京都から滋賀の日枝神社にまでいたっている。その間仏教徒と宗論を戦わし、比叡山にのぼろうとしたが果さなかった。また道に大友家の滅亡の戦いに遭遇している。その後、ザビエルは一旦、ゴアに帰り、中国に渡ろうとしてトラブルにまきこまれ、これを単身決行しようとして一五五二年二月三日病を得て薨じた。

(6) 有朋堂文庫、古事記・祝詞・風土記、塚本哲三編、有朋堂書店刊、大正七年。日本の祝詞、風土記等は、日本の古代を知る文献として今だに存在している。祝詞の印刷に附されているものは二九篇、風土記のそれは、五篇である。祝詞には新年祭、大嘗祭、神嘗祭等、今に制度として国家により国民の間に行われているものもあり、伊勢神宮をはじめ、各神社で神の御前に朗々とささげられているものも多い。中には、古事記の中にとり入れられた祝詞もあり、また「遣唐使時奉幣」といった誰も否定出来ない歴史的事実を語っているものもある。また風土記は、常陸、出雲、播磨、肥前、豊後等あり、中で出雲風土記が一番古いというが、これらは古代の宗教、政治、社会史であり、古事記にとり入れられた部分も多い。これらは古事記を含んで、キリスト教の旧約聖書、新約聖書の様に天地創造、人間の歴史等を語っているものである。しかしこれらは、明治以来の日本国家発展の精神的糧としてその役割をになわされ、真の歴史的研究は—これを肯定するにしろ否定するにしろ—これらに加えられなかったといってよい。そして第二次世界大戦後はその真実性が否定され、何となく一般人心から疎外されてしまった。しかし八万社といわれる現在の神宮、神社が依然隆々として世に存在しているのであるから、旧約聖書、新約聖書の様な意味でこれらが、宗教的思惟歴史として掘り起され、日本民族の生成のあかしとして研究されることは必要不可欠であろうと考えられる。

(7) 仏教は一神教か、多神教かはまた難解な問題であるが、一般に仏としては、釈迦牟尼世尊、大日如来、薬師如来、阿弥陀如来、観音菩薩、不動明王等があり、これら仏に夫々多くの同系統の仏達がある。まことに多彩であって、これは矢張り多

くの仏を夫々に祀る多神教と考えねばならない。しかし釈迦牟尼仏は、宇宙そのものであり、宇宙の真理と言うべき宇宙仏であり、他の仏たちは、釈迦牟尼仏の姿をかえたもので、もと同根であるという仏論もあって中々難解である。釈迦牟尼仏を宇宙仏とみるみかたは、キリスト教の神、イスラムの神と共に一神の崇拝と考えられる。しかし仏教ではこの釈迦牟尼仏をはじめすべての仏は仏身をもっていて、これらは仏像に具象されているのをみると「菊の香や奈良には古き仏たち」というみかたが一般的である様に考えられる。日本に伝来した仏教は大乗仏教（すべての人を乗せる）であって万人ことごとく仏となり得ると説いた。これがはじめて日本人におのれの家のとむらいをなすことを許したのであり、神道が、皇室の神と氏の長の神をのみ祀る風習をかえたのである。かくしておのれの家の祖先崇拝の思想を一般化し、国民一般の先祖の年忌法会という風習が定着する様になったのである。ここに仏教の日本生活様式に与えた大きな変革の影響があった。天武天皇十三年（六八五年）には、詔して諸国毎家に仏舎を造り、仏像及経を置いて礼拝供養せしめられた、という記事もある。但しこの毎家は郡家などという家の意で、国衛の府の官舎を云うのであるという説もある。日本仏教史、昭和十九年初版、同四十四年発行、辻善之助著、全十巻、岩波書店　第一巻上世篇、五―七、一〇〇頁。

一、ローマと宗教

ローマの建国

ローマの歴史は、最初ローマ歴史家によってギリシア語によって書かれて世にあらわれるのであるが、そのはじめは甚だ不確かな表れであった事は言う迄もない。ローマ史記述の歴史的研究というジャンルも立派に存在するのである。最初のローマ歴史家はQ. Fabius Pictor, Cincius Alimentusと言われ、彼等は紀元前三世紀に生きた。ラテン語のローマ史料編修は紀元前二世紀、一世紀に行われ、その最初の人は、M. Porcius Cato the Censor[1]であった。これらの記述は、それらそのものとしても現今では断片が残っているだけという。それらを利用したのは、有名なシ

クラス（Diodorus Siculus）、リビイ（Livy）、ディオニシウス（Dionysius）等であった。最初の人は、紀元前一世紀頃の人とされ、四〇巻の世界史をあらわした。古代地中海世界の遺物の研究からはじめて神話時代のローマからシーザのガリア戦争までを記述した。一巻から五巻までと、一一巻から二〇巻までが完全に残り、他の多くの断片も残存している。[2] リビイとディオニシウスは、アウガスタスの時代の人で前一世紀頃の史料を基として彼等のローマ史を表わした。リビイ（Livy（Titus Livius）？59 B.C.－17 A.D.）は、パドゥアの人で一四二巻のローマ史を記述した。その建国から前九年までを内容としている。一－一〇、二一－四五巻が現存している。これは夫々前七五三年から同二九三年、二一九年から一六七年迄を取扱っている。広汎な資料や学者の記録を充分に利用してその伝えるところを正直に記述している。彼の文学的才能は、感動的な物語り、会話体につくされ、彼の歴史書に永遠の魅力を与えている、とされる。その歴史は、ローマの貴族制的共和政を叙述する個人的研究として高く評価されている[3]ことは言う迄もない。

第一回ポエニ戦役（First Punic War）以前のローマ歴史家が利用した資料としては、次のものがあげられている。㈠高位僧官の年代記（Annales pontificum）、その記述は宗教的関係のものが当然多かった（飢饉、日、月食の様なもの）。㈡個々の貴族の言い伝え（碑文、葬礼の書かれたスピーチ、口頭の回想録）、㈢行政長官（司法官を兼ねる）の前五〇九年以降のリスト、㈣その他、宗教カレンダー、条約法等の本文、例えば一二表法の如きもの、等であった。

ローマ史記述学の研究は厖大なものでそこにたち入る時間もないのでこれを割愛するとして、ローマの宗教、特にキリスト教に筆をすすめなければならないが、すこしくローマ建国の歴史記述を考えてみると、ローマは、前七五〇年頃、ラムラス（Romulus）によって建国されたという。彼はレムス（Remus）と双子の兄弟であるとされるが、

狼の乳で育ったというのは有名な話である。彼の母は、三百年続いたアルバン系王室の娘で、レア・シルビア（Rhea Silvia）、父はニュミター（Numitor）王であったが、兄弟のAmuliusによって廃位された。一夜彼女はローマの軍神マーズ（Mars）に犯されてラムラス兄弟を生んだという。[4] 後ラムラスはレムスを殺害して王権をにぎり、サビーン（Sabines）族と覇権をわかちもったという。ラムラスの死後、ローマ人は、サビーンのVuma pompiliusを王に選出した。ローマの基本的宗教制度の若干を導入したのは、彼であるとされる。この王朝はは七代続くが、最後の王タルキニウス（Tarquinius）は暴政によって貴族の叛乱を招き亡んだ（BC五一〇年）。叛乱者は、共和政を採用した。政府は一年交替の二人の行政長官（司法長官も兼ねる、magistrates）によって支配された。彼等はジュピター（Jupiter, ギリシア神話のゼウス（Zeus）に当る神々の中の神、最高神）の神殿を創始した。

ローマの神々 (1)

ローマの神々は、リュペルシによるリュープケイリア（Lupercalia）の祭典による神がまずあげられる。これは日本ではルーパーカスと呼ばれるが、リューパカス神（Lupercus, 豊穣の神）がそれで、祭典はその為のもの、毎年二月一五日に行われた。この神は牧神でもあり、この日神官（Luperci）は山羊の皮衣を着て市街を回り、出会う婦女を多産と安産のまじないに山羊の皮ひもで打った、という。

さてこの様にローマの神は、自然信仰から発することは他の宗教信仰と大差ない。自然力、その現象、自然の活動、単純な抽象的観念、場所、場所の神性、知ることの出来ないものの起りの神威等に対するものであるが、これに対する信仰とは、religioから発するおそれ、良心のとがめ、自然力に対する迷信的恐怖心等を根源とする気持ちの発露

である。自然神の中にはジュピター（Jupiter）、マーズ（Mars）、シリーズ（Ceres）等があり、ジュピターは空と日を支配する。空の神として祀られ、天界の現象を象徴する雷鳴のとどろきと呼ばれる。マーズは軍神となるが、もとは、春の力をあらはし、その祭礼は三月に集中している。シリーズは、穀物、野菜の成長を全般的につかさどる。語源は cerus, to make grow（create）である。はじめ女神ではなかったとされるが、古典派時代迄に生産性旺盛な婦人の属性をそなえる様になり、その注意は、結婚式にその名に祈願をささげるという顕著な風習となり、この例外をのぞいて専ら農業にそそがれる様になった。五世紀には、シリーズは、ギリシアの穀物の女神ディメイーター（大地、穀物、麦、社会秩序の女神）に当てられる様になった。実際上、彼女の最古の神殿は、全くギリシアの影響下にあったと考えられる。何れにしろシリーズの信仰とストーリーは、純粋なローマ的背景を欠いていると考えられる。大体ローマの神々は、その相対神をギリシアに求められる（マーズは、Ares.）ことはすこしく前にふれたが、日本では、太陽神が「天照皇大神」という女神で、豊穣の神は「豊受大神」として長く歴史的に全国的信仰の対象となっている。

その他ローマの神々には、ビーナス、ジュノー（Juno, youth の支配）、テラス、ディス（Dis, 希神 Pluto, 地下の世界を支配する。また rich をあらわす）等々があることはよく知られている。ローマの神々は、おおらかな多神教の自然崇拝として長くつづくが、そこへ人間をとく、他神を認めない一神教のキリスト教が入りこむことによって事は繁くなり、国家意識の昂揚となる。

ローマの神々 (2)

ローマに於ては、宗教を主催する僧侶がエリートとしてそのトップクラスが支配階級を構成する。宗教的形式合理主義がその戒律を守るという点で宗教的法形式主義を生み、これが民衆の遵法精神を養い、民衆の精神的統一と社会的一体性の観念、法制の確定に資するのである。僧侶のうち重要なものは大神官（pontiff）の会議でこれには、占術師、神への犠牲を司る一〇名（Tenmen for sacrificing）も含まれる。大神官達は、神礼法と法律学を監督する。大神官の長は、国家に於ける公式の宗教行為のスポークスマンとして行為し、神官協会を屢々主宰する。この協会には一人の僧侶王、祭司、そして聖処女《Vestal Virgins, 女神 Vesta,（希神＝Hestia, 炉と炉の火の女神、国家を象徴するその祭壇では、聖火が絶えることなく燃やされていた）に身を捧げた処女、終生の純潔を誓い、この不断の聖火（vestal fire）を守った。人数は四人から六人。》が含まれていた。占術師は、宗教的見地からする国家と民衆の幸福と安寧の為の責に任じ、その占術的意見は、政治的影響力を振い、凶兆のしるしにより、又宗教的誤りが犯されたとして公けの集会に介入し、又選挙を避ける等の挙に出た。外国の信仰や儀式については、「犠牲を司る一〇名」にまかされた。神々に仕える神官は、flamen, sodaliti, Luperci, Salii に分れていた。フラメンは、ローマの初期、ジュピターに関する祭祀を行った。リューパカスについては先にふれたが、二月一五日の祭礼でパラティン丘の清めの宗教行事に従事した。パラティン丘は、ローマ七丘というAventine, Caelian, Capitoline, Esquiline, Palatine, Quirial, Viminal の一つでこれらの中心にあった。古代ローマは、この七丘の上に建設されていた。サリイは、三月中を通じて、マーズ神の為に祭祀を行った。その神性は、新らしい年の成長と戦争とであった。即ち成長と戦争の神である。

宗教的儀式は種々のものがあった。それは通常、正餐を供することと、神に犠牲を捧げることが含まれる。聖祀の夕食は神にのみ供される。毎九月には、ジュピターに収穫されたフルーツがそなえられる。異常時には、神のグループに対する饗宴が必要となる。同様の効果をもつものとして神と人が参加する正規の夕食がある。初期の一般的慣習としては、聖礼のデナーには全参拝者が含まれた。しかし後には、それは僧侶と行政（司法を兼ねる）官にのみ限って与えられる様になった。この種の儀式は、犠牲の供与とは異なるものであった。後者では、一神に全一食が捧げられた。或種の食獣は、捧げられた後参列者に分ち与えられた。即ちローマ人は、彼等が食べる事が出来た獣を神に供えたのである。それらは、豚、羊、雌牛、まれに山羊であった。たった一例馬が供えられたことがあった。獣は清らかなものでなければならず、又性と色によっても選ばれた。その他の供えものは、穀物、果物、酒、ミルクであった。香は早くから用いられ、後、東洋の乳香（frankincense）も用いられた。犠牲を焼くのは、祭壇で儀式の為に作られた石の火床か或いはその為に切り出して積み上げられた芝の上であった。

清めの儀式も重大であった。多くの型式があったが、通常のものは、清めるべき地を豚、羊、去勢牛等がその縁を廻るものであった。これらをほふるのは、土地の栄えの為であった。境い目や境界は、あらかじめ儀式が聖なる限界ときめた場所に人間や神を受け入れるか、或いはそこから排除するかをきめておく意味をもつものであった。ローマ人も他の古代民衆と同じく、場所の神聖さや、ある社会的団体の神性を信じるのであった（このローマ人の宗教観に対する解釈は、日本人にはよく理解し得る。日本では今日でも神式では土地の神性を信じ、これを祀る。ビル群の真只中で、土地にシメ縄をはって境界をつくり、神を降ろして大地の神威に祈りをささげ、御幣をふるい、これを投げて、四方を清める。即ち建築に先立つ地鎮祭の儀で、これを欠く建築はまずない）。時々、土地の神は、単純に「こ

の地の守護神」(Genius of This Place) 惑いは「この地を見守ってくれる神」(God Who Watches Over This Place) と呼ばれた。

ローマ人は、土地 (land) が、その住民に分ち与えていた力というものを信じていた。ローマ人が他国と他民族を征服した場合、彼等はその土地の神々を敬った。即ち彼等は征服した領土の主神や神々を祭式をもってよび出し、ローマにつれてきて、そこで適当な方法で神々を定着させ、いっきまつった。その代り、征服された街や農場については、彼等の境界標を破り去り、農場の溝には塩を撒いてこれらを清め、ジュピターとテラス神 (Tellus, or Terra Mater, 大地の女神、結婚と豊産を司った)、天と土壌に祈ってこれ等を冥界の神々に委ねて、その力の再生を禁じ、封じこめたのであった。この祭式はデボウシオ (*devotio*) と呼ばれた。自己献身の個人的儀式で、将軍は、例えば、字義通り自分を敵に委ねて祈り、その部下達の為に勝利をあがなった。デボウシオは、緊張と欠亡の時に神への献納と契約を行う誓いの儀式であった。献納はこの神への誓いから実現された。人が契約を守るという慣例的なやり方は、神への献納を誓うという事であった。ローマ人は、自分が負わねばならないもの以外は提供しなかった。神々は、その功徳と功罪によって報われた。

公民的神々の祭祀は、殆んど国家的神官にまかされた。家族的なまた伝統を重んじる氏族神の私的祭祀は、何世紀にもわたってすたれることなくつづけられた。私的祭祀の範囲、種類、固着性は、如何にそういった偶像崇拝的信仰が人々の間に深く根付いているかを物語っていた。家族信仰の原始的中心は、炉であった。ベスタの名は炉の火を意味する以外のものでは無かったが、家庭信仰がすたれていって、市の火を守る処女達によるベスタの公約祭祀が、その分盛んになっていった。

その他の家庭神としてピネイティーズ（Penates, ペナーテース、家庭、特に物置の守護神）、レアリーズ（Lares, 家庭の守護神）、ジーニアス（Genius, 土地、制度の守護神）があった。ピネイティーズは戸棚、食器棚の守護神であり、レアリーズは炉を支配しているとされたが、ローマの他の場所でも機能した。ジーニアスはローマ家庭神の信仰の典型とされた。この言葉は男性家長の繁殖力を表わしていた。少くとも家庭内各人の誕生日には、この神は献酒された（器から大地か、いけにえに酒が注がれること）。各家庭の食堂には必らず小さな神棚があり、そこにジーニアスの肖像画が、レアリーズのそれと共に祀られていた。そこには小さな炉があり、ジーニアスはトウガ（白いゆるやかな外衣、古代ローマ市民が用いた）を着て、片手に豊饒の角（ギリシア神話に発する）をもち、他方の手にぶどう酒の受け皿をもって二人のレアリーズの間に描かれていた。

ある古代学者達はこれら家庭神にさして重大な注意がはらわれていなかったと云うが、ポンペイ（Pompeii, Vesuvius 火山のふもとの古都、七九年に同山の噴火で埋没、一九世紀以降学術的に貴重な発見がなされている）の遺物等がこれらの意見に有力な反論を提供している。描かれたり彫刻されたジーニアスやレアリーズの他に彼等の種々の小さな像も色々と発見されている。(5)

ローマの宗教とギリシアの宗教

ローマの神々についての考察をここでは更にローマの宗教とギリシアのそれ、また日本の神々との比較を行い、これを通じて更に考えてみる。ローマには見た如く多くの神々が存在しそれは万神殿（Pantheon）にいっきまつられる程であるけれども、これらの神々は、一神を信じ主張するキリスト教の出現と定着によってその存在を失ってゆく。

多神教は、古い多様性として発現したが、そこに宗教的実践が考えられる様になると組織的思考がそれに加えられる様になる。それは生活の発展的合理化と関係している。それは神々への種々の祈り、願いとなってゆくのである。この段階で、神々の専門化、特質化、特性の附与、管轄権の問題等があらわれてくる。これはバラモン教のベェーダの神々（Gods of the Vedas）、ギリシアのパンテオンのそれら、日本の神道の神々にも共通している現象である。ローマの神々が神人同形説（anthropomorphic）による擬人化によってその管轄を限定されたということはすくないが、ローマの神々が自然物に宿るという範疇はギリシアの神々より、より具体的で不明確ではないとされる。他方、特性をそなえた人格への神人同型化と形式表現は、後者の神々がローマの真正の宗教に於けるよりも一層強い、という。

超自然の一般的性質に関する純粋なローマ的視点は、農民階級と土地小貴族にふさわしい国家宗教という形を保持する傾向が強いということにこの展開の最も重要な基礎が見出される。他方ギリシアの宗教は、諸英雄神が活躍するホメロス時代のそれの様な、相互関係的な地域的騎士文化の一般的構造を反映している傾向が強い。ローマに先立つギリシア時代のそれへの影響が、当然問題とされねばならないが、これらの観念のローマによる部分的受け入れと、その土壌への間接的影響はただホメロス叙事詩の審美的なそれとして残った以外、ローマの国家的宗教の性格に何の変化も及ぼさなかった。ローマ的伝統の基本的諸性格は、その祭祀の実践の中にほとんど完全に保持されている。尚、ギリシア的方式と異なり、ローマ的態度は、何時迄も騒々しい（酒神祭の様な底抜けの飲み騒ぎ）また神秘的タイプの宗教とは異なったものである。

真正のローマ宗教は、先にあげた要素から形式主義に向う傾向を有するが、ギリシアの文化との対比に於て、客観的合理主義という内部関係を有する非個人的な観念という根本的に重要な別の性格的特徴を含んでいた。ローマ人の

リリジオ（*religio*, その本源の意味は、おそれ（awe）と、良心のためらいととがめ（scruple）、そして迷信（superstition）は、彼の毎日の全生活とすべての行為を聖なる律法の決疑法（casuistry, 教会、聖書の律法などを適用して行為の道徳的正邪を判定しようとする方法）を以てとりかこんでいた。これは、ジュウリィやヒンズーの注意がその祭祀法によって、また中国人が道教によって、日本人が神法によって律せられていたのと全く同様であった。ローマ聖職者のリストは、特殊化され、特別化された殆んど無数の神々の名を含んでいる。あらゆる行為、そして実際上、行為のあらゆる専門化された要素は特別のニューミイナ（*numina*, 自然物に宿ると信じられている神霊）の影響下にある。それは従って、伝統が既に固定した責任と影響力を附与しているたしかな神々（*dii certi*, certain deity）を別にしてその管轄権も不明確であり、性別も効能もそして果てはその存在さえも疑わしい種々のあいまいな神々（*incerti*）を呼び出し、うやまうという重大な行動に出る人に対する予防的措置というものであった。一方ローマ人は、ギリシアのエクスタシー（*ekstasis*, ecstasy, Latin : *superstitio*, 恍惚境）を心理異常的疎外（*abalienatio mentis*）と解釈していたが、ギリシア人にとっては、ローマのローマ・リリジオの決疑法は、奴隷的卑屈なおそれ（slavish fear）とうつっていた。ローマ人がニューミイナを満足させておこうとする利益は、その各々がそれが享受した特別の保護力をもつ特殊の守護神の支配に割当られているから、すべての個々の行動をかれらの構成要素に概念的分析を行う効果をもった。

同様の現象は、インドやその他でも起ったけれども、即ち由来した霊魂（*numina*）のリストせられた数は、公式に純粋な観念的分析を基礎としてそれらはリストせられていたが、知的抽象化は何処に於けるよりもローマ人の間で大きかった。というのは、これらに対する祭式の実践は、この手続きに十分に依據していた為である。この抽象から

結果したローマ的生活の独特の特性（そしてこれは、ジュウリイ的、アジア的祭式の彼等夫々の文化に及ぼした影響との対比を提供するが）は、止まる事無き実際的、合理的聖なる律法の決疑法（律法によって道徳的行為の正邪を判定する）の適用、即ち一種の聖なる法律学の発展とそしてこれらの事柄を惑程度まで、法律家の問題として取扱おうとする傾向とであった。この方法で、聖なる法（律法）は合理的法律的思考の母となった。本質的に宗教的なローマ文化の性格は、依然、リビイの歴史書の中に明らかである。ユダヤ的伝統の実際的適応に比較してローマは常に、所与の制度的新方式については、そのどの様なものにも聖にして国家的なる法の観点から「正しさ」を強調した。ローマの思考に於ては法的礼式の中心的な問題は、神罰ではない罰、悔悟、救済であった。

我々が最初に注意を捧げねばならない神性の諸観念については、然し乍ら、二つのプロセス、即ち神人同型化と管轄範囲限定が相互に平行しまた反発し合い乍ら、神々の祭祀と神の観念そのものの合理化を—出発点は、所与の種々の神々であったけれど—推進し、押し進める傾向を含んでいた事は当面の問題に適切であった。ここに於ける我々の目的にとっては種々の神々や悪魔の検討はただすこしの関心を引くだけとなろう。それらは、言葉の使われる全範囲の様に、異なった夫々の国民の経済的情勢や歴史的運命によって直接形づくられてきたことは全く自然なことであったが故にである。これらの発展は、時間の霧によって我々から隠されているから一つの神性の他の種類の神性に対する優越性の理由づけは、しばしばそれ以上は出来得ないのである。これらは、星の集合体といった経済生活に重要な自然的客体の中にか、或いは神や悪魔がとりつき、或いは影響し、呼び起し、或いは妨げる有機的プロセスの中にかに横はっている。即ち、病、死、誕生、火、旱魃、暴風雨、そして不作等。ある出来事の中で、極めて経済的に重要な事柄は、万神殿の中で特別な神に最高の地位を与えている。即ち天の神の第一義性である。この神は、第一義的に

光と温暖の支配者と考えられている。しかし、家畜を飼育する人々の間では、この神は生殖作用を司るそれと考えられている。

母なる大地（Mother Earth, 産物、住民を生む母なる大地）の様なサーニック（chthonic, 神、霊が、地中、地下に住む、地下の神々、霊）な神性の崇敬は、農業の一般的に相対的な重要さを前提としていることは明白である。しかしこの匹適性は、常に直接的ではない。そしてまた地上を超えた英雄達のパラダイスに於けて代表達としての天上の神々が、あらゆる場合に、農民の地下的神性よりも寧ろ気高い神々であり得るという事も主張し得ない。母なる大地の女神としての発展は、母系制社会組織の発展と平行しているという事も更に強くは主張し得ない。しかし乍ら、収穫を司る土地の神々は、通例他の神々よりも更に地方的で民衆的な性格を生じる。とにかく、土地の神格の雲の上や山獄に住んでいる天上の人格神に対する劣等性は、屢々騎士的文化の発展によって決定される、そしてそこには、元来土地の神性であったものを天空に住んでいる神々の間に場所をとることを許す傾向がある。逆に、サーニック神は屢々本源的に農業文化である点に於て次の二つの機能を併せもつ。即ち、富を嘉みしながら収穫を司る役目を果し、同時に地下に横たえられた死者を支配する役目をもつのである。この事は何故屢々、エレウシスの秘儀《Eleusinian mysteries, 古代ギリシア・アッテカのエレウシスで豊饒の女神ディメイーター（Demeter, 大地、穀物、麦、社会秩序の女神、ローマのCeres）の祭典として、もとは毎年、後、隔年あるいは四年ごとに挙行された神秘的な儀式》に於ける如く、これらの二つの最も重要な実際的利害問題が—即ち地上の富と来世に於ける運命と—サーニック神に依據するのかを説明している。他方、天の神々は、自らの行程にある星達の主人である。天界の物体が、それによって明らかに規制されている確定された律法は、天界の物体の支配者が確定された法、特に司法的決定、道徳をもち或い

はもたなければならない総てのもののマスターとなることを嘉みしている。

典型的構成分子とそして諸タイプの行為の増大する客観的重要性と彼等についての主観的反映の二つが、諸神の中の機能的特殊化を推進する。これは、「行為励行」の諸神のケースに於ける如く、寧ろ抽象的タイプのそれで、インドの多くの神々はこの同類のそれらである。或いはそれは、特別の活動の枠組み、例えば、懇願する、魚撈する、耕作する、といった質的特殊化に導かれるかも知れない。この神性形成の公正な抽象的形体の古典的模範は、懇願の主としてのヒンズー万神殿の最高の観念としてのブラフマー（Brahma, バラモン教、ブラフマン、世界の根本原理、これを神格化したもの、梵天。ヒンズー教では、Vishnu, Siva と共に三大神の一つ、創造を司る）である。バラモン僧は、諸神の効果的な魔術的強制力の下にある効果的懇願（祈り）の力を独占したので、その反射から一神がこの能力の展開を独占する事となり、これによってあらゆる宗教的態度の中の最重要なものを支配し、結果、この神は、唯一神ではないけれども最終的に最高神となることになった。ローマに於て、ヤヌス（Janus, 双面神、前と後ろに顔をもち、左手に鍵、右手に笏を持った神で、日出、日没をはじめ一切の事の初めと終わりを司り、門や入口を守護した）は、事の正しいはじまりの神として万事を決定するものであるが、更に控めに相対的万能神としての立場を獲得した。

特別な神を欠いては、何らの共同的行為はなく、何らの個々の行動もない。実際、もし一つの合同体が永久にその存在を保障されるべきであるならば、この様な神を持たなければならない。一つの組織が、個人的な支配者の個人的力を基礎とするものでなく、純粋に、人々の共同体であるならば、それはそれ自身の神をもつことが必要なのである。(6)

二、ローマの神々と日本の神々

自然崇拝

ローマの神々が自然崇拝を根本儀として地上にあらわれた事は前にふれたが、この自然崇拝から発した宗教は—すべて宗教の根源はそうであるとして—源初形態として種々のそれら—ヒンズー教(Hinduism)、バラモン教(Brahma)、道教（黄帝、老子を教祖と仰ぐ多神的宗教。無為、自然を旨とする老荘哲学の流れを汲み、これに陰陽五行説や神仙思想を加味して、不老長生の術を求め、符呪・祈禱などを行う。後漢末の張道陵を開祖とし、仏教の教理をとり入れて次第に宗教の形を整え、中国の民間習俗に永く影響を及ぼした)、仏教等々を含んでいる。そしてここで重要な事は、勿論、日本神道もこの中に含まれていることである。本稿では近代外交史の三要素を検討することが目的であり、序にのべた如く、十字軍と地理的世界発見の後、宗教改革の問題にすすむものであり、ここにローマの神々と日本の神々の比較の論稿を入れることは、目的から逸脱するものである。しかし宗教と政治との関係は人間を介して頗る重要である、表裏一体をなすといって過言ではないので、ことここに進んできた以上ここに当該問題をとりあげないわけにはゆかない。

古代の神々のうちローマの神々と日本の神々—勿論神道の神々であるが、これは神と呼ばれ、日本仏教の仏と自ら区別されている。双方多神教である一つの顕著なそして他宗教の追随を許さないなりたちである—はまことに類似神である。他の自然崇拝教の神々も同類項であると云えるが、ここではキリスト教の関係で、ローマの神々のみをとりあげる—自然崇拝（信仰）は、自然力、その現象、自然の活動、場所の神聖、ものの起りの神威等へのそれであるが、

その中で特に重要な中心をなす崇拝は、生殖のそれである。即ち、生命を与え生命をつくり出すことである。これなくしては、人類や生物のいのちの継続はない。これをスムーズに行う為に右にあげた自然への崇拝、祈りがあるのである。[7] これが牧畜、農業、漁撈等の生産活動への祈りとなってくるのである。後世、チャールス・ダーウイン（Charles Darwin）は適者生存（survival of the fittest）の原理として「食糧の獲得、再生産、自衛」の三要素をあげたが、これはその言わんとするところは、古代人の祈りの感覚と何ら異るものではない。[8] そしてこうした祈りは、右の自然現象がとどこおりなく年々にスムーズに行われる様に懇願するところから来ている。それは自然現象には、人間は決して主体たり得ない。否、その一部であるに過ぎない。そこでその一部たる身分で、自然そのもののスムーズな変りない進行を願うのが懇願となり祈りとなるのである。そしてこれは時処を問わず、凡そ人間のあるところでは、何処でも同じ様にみられる現象である。（今日でも工業生産は人間が主体たり得るが、その元である農業は古代と何ら変るところはない。天変地異についても同様である。）この古代人の祈りは、更に原始時代の人類にも同様に変るところ無く存在していた。この点に関して言えば人間が人間である限り、そして彼等が自然の客体的一部分である限り、原始人も古代人も現代人もこれについて何ら異るところはない。

原始の祈り

人間が、自然のスムーズな運行と運転を願う心持のうらは、それが乱れ、乱されることのない様にという、ひょっとそんなことが起らないかというおそれ、自然力に対する迷信的なおそれ、である。そしてここから自然を怒らさないこと、自然をあがめ、汚濁、けがれをとりさって自然に不快を感じさせない事がもう一つの祈りの内容となる。日

本の神道がとくに穢れに敏感で、この為の種々の祭祀があるのは衆知のところであるが、これは全国にある約八万社の神社を通じて今日、原子力時代にも堂々と生々と実践されている。(9)

原始の祈りも何らこれと異るところはない。それが所謂広汎な意味の宗教となる。宗教の起りは、ここからである。これらの祈りの中心は矢張り生殖であった。旧石器時代（Old Stone Age）の人々は、死者を祭祀を以て地下に葬り、そして大地に豊沃の祭祀を捧げた。これが以後の宗教の原型である。誕生と死の不思議に対する祈りがこれを補う。祭祀の原型はBC第三千年期のエジプトのプター神（Ptah, エジプト神話、首都Memphisの氏神である創造の神）によるそれである。プターは天地の創造神で神々を造り、彼等を夫々にいっきまつられる地に据え、彼等への供物を定め、聖堂の基礎をたてた。これが矢張りその後の宗教と祭祀の原型となった。この物語りは大英博物館所蔵のシャバカ石碑（Shabaka Stone）に記されている。同じくシュメール（Sumer, 古代バビロニアの南部（Mesopotamia）、Euphrates河下流地方。紀元前三〇〇〇年頃入類最初の都市文明が形成され、紀元前二〇〇〇年頃バビロニア人によって征服された。）文化にもこの類型の物語りがある。そこでの記録は、さきのエジプトと同時代、シュメールの神々が、賢明の神エンキ（wise god Enki）によって召仕いとしての人間が粘土から作り出される迄、如何に食物を準備する為に労働したかを誌している。換言すれば、古代のシュメール思想によれば、人類の目的は、犠牲によって神々に食を供し、また彼等を社殿にいっきまつることであった。

神々は、すでに前六世紀頃に、夫々の人種に応じてその姿をあらわしてい、トラキア人（Thracians）の神々はグレイの眼、赤い髪を持っており、エチオピア人の神々は、ネグロイドの特長をもっていた。牛や馬が彼等の神をつくるとすればそれは、牛体、馬体のそれとなろうと言われていることは、今日常識となっているが、この小論で問題と

している神々の一つである女神はすでに前五世紀頃にエジプトに現われている。それはイシス（Isis）である。彼女は豊穣と受胎の女神でOsirisの妻、Horusの母。古代エジプトで最も広く信仰された。この女神は、偉大なる女神としてエジプトだけでなく多くの民民にいっきまつられその所、所で名をかえていた。曰くミネルバ（工芸、芸術、戦術、知恵の女神、ローマの神）ギリシア神のAthene（知恵、学芸、工芸、戦争の女神、父Zeusの頭から甲冑をつけて生れたと伝えられる、Athensの守護神）、ビーナス（ローマ神話、春、花園、豊饒の女神。ギリシアの愛、美の神Aphrodite）、シリーズ（穀物、みのりのローマの女神。ギリシアのDemeter）等である。この女神が生殖と豊穣の神としての原型と考えられている。この観点からすれば、日本の天照皇大神もその転生の一つと考えられるかも知れない。こうして神々の生成、その誕生は、源初に於て、人々の生殖への懇願、その祈りから発していた事が、よく理解されるのである。但し宗教の動機が、人間の死の恐怖からの開放にあった事も否定さるべきではない。即ちそれは大膽な神官（僧侶）、予言者による死と未知に対する恐怖の払拭から生起したのであった。彼は、死は身体の消滅によって邪悪から人間を解放するつとめであり、これを越えれば、そこに最早何ら恐れるものはない、と論ずることによって人類の恐怖をとりさろうと努めたのであった（according to Latinpoet & philosopher Lucretius, 1st century B.C.）。(19)

日本の類似神

日本の神々の伝承は勿論、古代にその生成を果しているのであるが、その存在が連綿としてつづき、現代日本の原子力時代の世に生々としてその精神界に君臨している。即ち神々として今日存在し、尊崇され、ある人々に於ては統

治されさえしている。古代ローマの神々が、キリスト教の流入と国教化に従って、その存在の根幹を消去してゆくのと大へんな相違である。この日本の神々の存在は、世界史的にみて稀なそれであろう。しかしこの日本の神々は、単独に独立または孤立して存在していたのではなかったというのは、彼等はその実在に於て、彼等と相引き合う、類似の神々、または同一視さるべき神々の存在を予定していたのである。即ちこの意味に於て、この日本の神々やその伝承は、日本の近隣諸国に、その大きな影を見出す。即ち、彼等は、環太平洋のミクロネシア、メラネシア、ポリネシア、東アジア等の島嶋や国々、即ち中国、朝鮮、マレイ半島、インドシナ、スマトラといったところに君臨している神々とその同一性、類似性をもっていると云われるのであり、これらは、一方、種々緻密な、また広汎な研究が行われて主張されているところなのである。(11)

そしてこの日本の神々はまた古代ローマの神々とその自然崇拝、農耕、生殖のそれらに於て全く類似神、はては同一神としての特長を明確に示しあらわしている。そしてこの事が、本稿に於て傍証的に重要な事柄なのである。即ち日本の神々は単に環太平洋や東南アジアの神々とのみ同一性、類似性を保っているのではなく古代ローマの神々ともその同一性類似性を保っているのである。そのことは、既にしてローマの神々を論じた箇所を一瞥すれば、明らかである。そして日本の神々が、東南アジアの神々のみならず、古代ローマの神々（その意味ではギリシアの神々）と同一性、類似性をもっていたという事は我々日本人にとっては何とおおらかで心ゆたかな事柄であろうか。ローマでは、春を祀り、収穫と豊穣を司る神々があった。即ち前出のマーズ神、リューパカス、シリーズ、ビーナス等である。これと対比される類似神、同一神が日本にも厳然として存在している。それは天照皇大神であり、高皇産霊神（タカミムスビノカミ）、豊受大神、津速産霊神、神皇産霊神（カミムスビノカミ）等の神々であり、また御膳八神と称される八体の神々である。(12)

これらの神々は、豊穣の神々であり、生殖と生成を司っていた。その意味でこれらの神々はローマの前出の神々とその楔を一にしている。天照皇大神について云えば、この神は、日本国家の最高神であり、皇室の祖神として崇敬を集めているが、その一方この神は、太陽神と考えられ、その陽の光りによって万物を化生し、また万物の生育をうながし、豊沃を約束するものとされた。その意味で天照皇大神は女神である。しかしこの神は、最初男神であったという説もある。またこの神は持統女帝のときにはじめて女神としてあらわれ、国家最高の神となったという説もある。しかし生成、化成の源が女性であると考えられたのは、古代よりのならわしで、ローマや日本の古代人は、人々を生殖、増殖する女性の力に神秘な霊力の存在を感得し、これを万物の生成の源と考えたことは、容易にうなづけるところである。そして、自然の力の源泉を女性に求めた事は、ごく自然にうべなえることであり、こうしてローマや日本の自然を司る神々が、すべて女神となったのである。かくして天照皇大神も女神として豊穣、生育の神として君臨し、今日にいたるも日本全国民の崇敬を受けている。この事は、前出のローマの神々とその機能するところは一なのである。そしてこの大神のみならず、同じく伊勢神宮にまつられる豊受大神も女性の姫神として豊穣の神であり、主としては農耕にかかわり、種や収穫、養蚕や工芸の神としてその役割をふるったのであった。更にタカミムスビの神は、樹々に関係あるとされ、その生育を司り、またムスビという語は、ものの生成を意味するとされたのである。この様なローマの神々との形態、機能に於ける類似神は他にも多数みられるが、こうして日本の古代人は全く古代ローマの人々と同じく自然を崇拝し、そのスムーズな運行と生産を懇願してその為にその祈りの対象として崇拝する守護神を全く古代ローマのそれらと同型の神々として考え出しこれをいっきまつったのであった。(13)

これらの神々については、一応それらがつくり出され、また組織化された明確な年代は捨象して言及している。日

本の神々と古代ローマの神々を比較考量することは、本稿の主目的ではなくまた限りもないので、ここでうち切るが、尚次の事柄はこれにつき重要なので記憶されなければならない。

一、斉宮　古代ローマには炉と炉の火の女神としてベスタ（Vesta）があり、この火を祭り、たやさぬ為にこれに選ばれた、四人から六人の聖処女が神殿に仕えた（Vestal Virgines）のであったが、この事は日本にも同型の実行があり、日本では伊勢神宮の火を守る為に斉宮（さいぐう）がたてられ、皇族の未婚の処女が斉王としてここにつめ多くの未婚の女性がこれに従った（この実践は天武天皇から後醍醐天皇の南北朝時代まで約六六〇年間つづく）。[14]

二、新嘗祭。これにもローマ、日本同型の実行があり、古代ローマでは、九月に収穫された新らしいフルーツがジュピターに供えられた。日本では新穀が神に享され、新嘗の祭りが厳重な物忌をともなって修された（日本では戦前（第二次世界大戦）、新嘗祭（天皇家の行事）、神嘗祭（一般国民的行事）としてこれが実行されていた。）。[15]

三、清めの儀式と地鎮祭。双方共土地の神を祀る儀式で、古代ローマ、日本共、土地の境界や境い目を尊重し、人や神をそこに受入れるか、受入れぬかをきめておく為にこれが行われた。これらは穀物を生成する水、土地、風雨等の自然現象を当然重視し、尊崇してこれらを祀ることからきている。[16]

四、倉の神。最後に、古代ローマ、日本に共通した身近な神とその祭りがあった。即ち、古代ローマでは家庭神として物置、戸棚、食器棚、炉等を守る守護神があった Penetes, Lares。日本では「倉の神」が家庭神とされ、ミクラタナノカミとして祀られた。またクラダナは神の座を意味した。

（1）古代ローマの監察官で住民調査、風紀取締まり等を職務とした。

(2) Dictionary of World History, ed, by, G.M.D. Howat & A.J.P. Taylor. 彼の歴史は、資料的に大へん有益であるが資料を機械的に記述することと、権威的とされる時代や地方の記述に無批判的に追随することに弊があると云われる。

(3) リビイの歴史は、教訓的説話にその主題があるとされ、そのローマの政治、戦争、私生活等にあらわれるローマ的道徳律を尊重し、各時代の指導者の道徳的態度に光をあてることに彼の資料を用い、これをその様に組みたてた。この特長化の為、心理的な、また適当な歴史的な時代になされたスピーチを集大成することに重点が置かれた。The Decline of the west, Oswald Spengler, G. Allen & Unwin LTD. sixth impression, 1959, vol. II, pp. 383-84. ここでスペングラーは、都市国家（city state, Polis）に言及し、リビイを引用している。この時期都市国家以外、国家の形態、思考、感覚はない、と言い、エトラスカン、ドーリアン、マセドニアン総てその支配の下にあったとする。アレキサンダーと彼の後継者は、オリエントに遠く広く彼等のヘレニスティック都市をちりばめた。それ以外の政治的組織は考えられなかった。シリアに対するアンチオーク、エジプトに対するアレキサンドリア、すべてそうである。ローマ帝国（Roman Imperium）は、巨大な宗教会議主義の基盤の上にたつ最後のそして最大の古典的都市国家以外のものではなかった。マーカス・アウレリウス（Marcas Aurelius）の下で、演説家であったアリステイド（rhetor Aristides）が、それは、この世界を都市の名に於て一つにした、と言ったのは完全に正当視される。何処に於てであれ、人がその中で生れた場合、彼が住むのは、その中心に於てである。帝国の征服された人々―遊牧の砂漠種族、アルプスの高地バレイの共同体住民であれ―彼等は市民階級（civitates）として組織される。リビイは、いつもきまって、都市国家の諸形態で考える。そしてタキトス（Tacitus）には、地方政庁歴史は、全く存在しない。四九年にポンペイ（Pompey）が、カエザルの前から撤退し、軍事的にローマは重要ではないとしてこれを放棄し、そして作戦の堅固な基地をそこに作るのだといって東方に赴いた時、彼の悲劇的な運命は定まったのである。都市を放棄した彼は、支配階級の眼には、国家を捨ててしまったとうつったのであった。彼等にとっては、ローマがすべてであった。

(4) ラムラスの先祖はトロヤン・アエネアス（Trojan Aeneas）で、彼はラビニウム（Lavinium）朝の基礎を作った。彼の息子が、アルバ王朝を築き、これが以後三百年間続いた。ある説は、ラムラスは、ニュミター王・真正の孫であるとし、またトロヤン・アエネアスの孫であるという主張もある。ローマ建国年についても前八一四年、前七四八年、前七二九―二八年説と種々ある。最も権威的というのが前七五三年説で、これは前一世紀後半に有名な古事研究家バロによって確定され

た、という。これにも種々の考證が存するがここでは割愛する。

(5) Encycopedia of World Religions, PPC & Octopus Books Limited, 1975, pp. 70-73.

(6) Economy and Society, Max Weber, An Outline of Interpretive Sociology, 1, edit. by Guenther Roth and Claus Wittich, Univ. of California Press, 1978, pp. 407-411. A History of Religion in Britain, edit. by S. Gilley & W.J. Sheils, Blackwell, 1994, pp. 13-23. ローマ人は、自己の宗教を彼等が征服した諸民族に押しつけることは無く、夫々の種族の宗教を尊重したというが、ローマ宗教の被征服民への影響は、次の如くであった。帝国の支配階級は、被征服民をおだやかに従え、開明し、秩序をたてることを望み、その時宗教はあらゆるこれらのプロセスに含まれた。ドゥルーイド(Druids, 古代、ゴール、ブリタニア、フィルランドのケルト(Celt)族の間に行われたドルイド教の祭司。予言者、詩人、裁判官、魔法使いなどでもあった)は、征服されたローマに対するレヂスタンスの焦点を供給するが、Harlow in Essex, Hayling Island in Hampshire, Uley in Gloucestershire 等に於ける発掘が証明する如く、これらに於ける夫々の祭祀は中断することなく続けられていた。この期の唯一のローマ聖廟に関する地方民のレヂスタンスは、グロセスターに於ける Divus Claudius の大神殿に対するそれであった。ドゥルーイドとの衝突も、ローマ征服民の豪慢さから結果しているもので、決して外国信仰への攻撃という性格をもっているものではなかった。宗教の外形にもローマ風の影響はよくみられる。英国の神殿には、ラテン語がきざまれた祭壇があったし、貴族の邸宅にはローマ風があり、行政廟と市場の混合した建物があったが、神殿のあるものは完全なローマ風で、地中海世界のグレコ・ローマン的建築装飾、即ち円柱、壁につくるかざり柱、三角型の切妻壁を顕著なその特長的建築装飾としてもっていた。第三の特長としてはローマ型神像のそれがある。これが、しかし最も重要であるかも知れない。彫刻者がローマの神々の誰かを作ったとき、それは彼のパトロンによって聖地に於て継続的に祭られた。ウレイに於ける前ローマ的素材は、軍神を示唆しているが、ローマによる征服の後にもそれは祀られて、小さな槍がそれに奉納されていた。マーキュリー(Mercury, メルクリウス・マーキュリー、ローマ神話、神々の使いの神で雄弁、職人、商人、盗賊の守護神、ギリシア神話の Hermes)の神像もあった。それはプラクシテレス(Praxiteles, BC四世紀のアテネの彫刻家、優美な女神裸体像で有名)による立像につづくもので、また祭壇の上の奉納された立像やブロンズの小さな像などもこの神を象っていた。ローマ時代、この長くつづいたケルト神像は、その碑文等からマーキュリーであると解されている。この神の源初の名は失われていた。バースにある重要な神殿に祀られ

ていたサリス（Sulis）と呼ばれる女神は、ローマのミネルバ女神とされている。神々に対する生物やものの捧げものは、ケルト人によっておびただしく行われた。しかし法律観念の強いローマ人達は、これを高度な形式の神との契約と観じていた。最初祈禱者は、神に恩恵を懇願する。そして正義の様な神徳をたたえ乍ら、もし神がこの願いをききとどけてくださるなら恩にむくゆる報酬を支払うと約束するのである。それが果されると支払いとしての捧げ（solutio）が実行される。それは犠牲、彫刻された石の祭壇、その他であった。南部スコットランドから出土するレリーフに描かれたささげものの雄牛、雄羊、雄豚等は、ローマから出土する多くのレリーフに示されている祭式と一致している。神殿跡の発掘物は、その碑文等の証拠と共にローマ祭式の実行が英国の民衆に十分に受け入れられていた事実を示している。これらの犠牲は、神官によって統制されており、これらはマーキュリー祭祀の為のヤギ、雄羊、雄の若鶏等であった。ウイルトシャイヤーのアポロの神殿やリンカーン近傍のマーズに比定されるそれらはただ皮相なローマ化を示唆するにすぎないが、そこに鉄器時代（Iron Age, ギリシア神話、鉄の時代、golden age, silver age, bronze age, に続く、世界の最後の最も堕落した時代）から継承された神性の観念とローマ・イデオロギーのそれとの間に大層見事なバランスが保たれていた。アポロは狩猟を司り、マーズはまず第一に農業神であった。人々がこれらの神々に祈ったものは、土地、獣の豊穣、家族の豊かさが最も重要なそれらであった。三つの母性神 Mars, Diana（異形、Deana, Deanna, Dyana, Dyane. ディアーナ、ダイアナ、月の女神で処女性と狩猟の守護神、希神話の Artemis）、Silvanus（希神の Pan, Faun と同一視された。森林の神、牧野の神、牧神）は、膝の上にフルーツの満ちたバスケットを抱え、子供達にとりまかれて、豊穣のつの笛をもっていた《Cornucopia, 希神話、豊穣の角（幼い Zeus に乳を与えたやぎ Amalthaea の角、その所有者が欲しい物はなんでも豊富に作りだす horn of plenty とも云う）。角の中から花や果物や穀物があふれ出ている形をあらわした絵や彫刻》。ローマの商業の発達と共にマーキュリーは全般にあがめられたが、この神はまた田園神としても崇拝された。ミネルバは治療の神であったが、また手工業を司り、チチェスターのかじやのギルドはネロ（Nero）の時代、ネプチューン（Neptune, 希神の Poseidon, 海神）とミネルバを祀る神殿をたてていた。ミネルバと並んで今日尚、有名なバッカス（Bacchus, 希神、酒神、別名 Dionysus）の神殿もウイルトシャイヤーに建てられていた。彼の従者とされるオルフェウス《Orpheus, 希神、Apollo と Calliope との子、Thrace の詩人で音楽家、彼の奏する竪琴の美しい調べは鳥獣、草木をも魅了したといわれる。死別した妻 Eurydice を追って地下界に降り、音楽で Pluto（希、羅神話、黄泉の国（Hades）の王）の心を動かし「地

上に達するまで妻の顔を振り向かない」という約束で妻を連れもどすこととなったが、出口で約束を破ったためその希望を果せなかったという。》も用じくその神殿にまつられている。バッカスの救済者としての面影は、ケントから出た鉛の棺のふたにその姿が彫られていることと、グロセスターシャイヤーの墓に収められているその小彫像からおしはかられる。一般世界に於てバッカスは偉大なそして慈善を行う自然の力を代表していた。彼と彼の従者達は、シレンセスターの巨大な独立柱の柱頭に高浮彫りでほりこまれていたし、また他の神々と共にバースのサリス・ミネルバの神殿の前に立っている祭壇に示されていた。東方からローマにもたらされたというキュベレ《Cybele, Phrygia その他小アジア地方の女神、神々の母である大神で the Great Mother of the Gods と呼ばれ、穀物の実りを表象する。ギリシア神話では Rhea と同一視されることもある（希神、Uranus と Caea の娘）。Cronus（巨人の一人で Uranus と Caea の子、父の王位を奪ったが、後わが子 Zeus に退けられた。羅神 Staturn）の妻で、Zeus を初め、Hera（Zeus の妹で妻である女神、天界の女王で嫉妬深い。羅神 Juno）、Poseidon などの諸神の母。羅神 Ops》とアッティス（Attis, キュベレに愛された phrygia の少年）も英国でマーキュリーやバッカスと共に信仰された。彼等へ捧げられたと信ぜられる神殿が Verulamium（St. Albans）で知られている。Dunstable の墓地から出たかめに彫られた銘のそれから Verulamium の樹木愛好（dendrophori, アッティスは松の木の下で死んだとされる）が知られる。ロンドンに於て、テームズ河からアッティースのブロンズの小立像が発見されている。またこわれてしまった一対のブロンズの締め具も発見されていて、それには非常に丹念な装飾とアッティースとキュベレのバストが彫られていて、非常に華やかなそれらへの信仰の祭式があった事が示されている。又アッティスの狩人姿の像やレリーフも発見されていてそれが地方の狩猟神と融合されていた事実を示している。古代ローマ軍団の司令官やまたそれらの軍人達によってたてられた神殿もそこにはあった。

(7)　「日本の神話」松本信広著、日本歴史新書、至文堂刊、昭和三一年、三四年　二版、一一三―一四頁、一二一頁。「日本古代の耕地と農民」、森田悌著、第一書房刊、昭和六一年、一五九―六〇頁。「神道の本」、学習研究社刊、一九九二年、一八―二三頁、五二―五七頁。「伊勢神宮」、岩波書店、一九九五年。古代の人々にとって、矢張り最も関心の高かったものは、生活であることは勿論で、その中心は生産であった。その中でも人が人を生むということは、大きな驚きであったし、これが生産の基本であった。即ち労働力、工具、機械、戦力として活用出来る唯一の力は人間のそれであったからこれを生産、育てることがまず第一に重要であった。総ての基本であった。そしてこれをなし得るものは女性に限られたから女性が

生産の基礎であった。そして総てをやどすものは自然であり、自然の力と恵みを欠いては生産はなく、生活はなかった。そこでスムーズな天体の運行、四季の移り変り等を懇願する事が人々の生活の一部となった。そしてその生産の力は、生殖力に於て女性のみが果し得ることからこの意味の自然への祈りが、これを司る女神の誕生となり、女神への祈りとなって、すべての生みを司ることとなったのであった。これが生産、生育の神が殆んどすべて女神であったことの所以である。この事が古代ローマの神々でも日本の神々でも同じであることは興味深い。このことは、農耕時代に入っても殆んど変らない。そしてこれについての日本の祖神は天照皇大神とされ、この神は女神とされ、豊穣の神となって同じ女神の豊受姫神と共に生産を司ることとなった。天照皇大神は日の神とされたが、これは世界各地で行われている太陽崇拝と楔を一にするものである。太陽こそは、自然運行、天地陰陽周行の中心的存在であるからである。女神への信仰が強いときは、その民族は、生産に意欲的であり、活動と発展をめざしているが、そうでなくなるときは、女性は生殖をさける様になり、結婚もさけて、人的再生産をとどこおらせることとなる。これが出生率の低下となり、民族の力は矯められて弱化し、人口の減少をまねく。これが民族の衰亡を招く事は、言う迄もない。こうなってくるとその雰囲気におおわれて、結婚した夫婦にも子が授からなくなる。民族の滅亡である。スペングラーのいう様に、歴史上その活働と役割を終えた民族はこうして滅亡するか、衰えてゆかねばならないのであろうか。天照皇大神の下で女性の生殖力の再活性化を願うに切なるものがある。日本文学の歴史、1、「神を祭る者」、小林行雄、池田弥三郎、角川源義編著、角川書店刊、昭和四二年、八四―九一頁。天照皇大神を卑弥呼とし、大和を邪馬台とする魏志倭人伝の日本記述があるーこれは日の御子（ミコ）、大和（ヤマト）を夫々音によって解し、これらに右のいやしい字をあてたのであろう。卑はイヤシ、ヒクシ。邪はヨコシマ、正しうない（漢和大字典）。これは、日本と中国、韓国（朝鮮半島）との交流で、必らず当時の通訳官がおったであろうからこれらに日本語の発音をきいて、こういった造語を行い、夫々の名にあてたのであろう。この魏書、東夷伝、倭人の条というただの一項目に日本人は、何百、何千というおびただしい、まさに汗牛充棟もただならざる主張や研究の書物を書き上げて積み上げた。そのロマン性と物語り性には他の追随を許さない何物かがある。脱帽の他はない。これは今や魏書から出て魏書をはなれた香り高い人々の秘密性をくすぐる文学の一ジャーンルであろう。

(8) The Age of Nationalism and Reform, 1850-1890, Norman Rich, London, 1971, pp. 71-74.

(9) 例えば、穢れを払うものとして「歴史公論」一九、上古史特輯、「高天原の再検討」石井櫻樹、雄山閣、昭和九年、五四―

五五頁。「日本宗教総覧、神道に於ける死と葬礼」、上田賢治、新人物往来社、一九九三年、四二―四七頁、触穢は、消極的な回避というよりもむしろ積極的な祭りへの姿勢の面からこそ理解されるべき事が主張されている。

(10) Encyclopedia of World Religions, op. cit. the Dawn of Belief, pp. 11-12.

(11) 「日本古代の耕地と農民」前掲書、一六一、一六八頁。「日本の神話」前掲書、一一七、一一八、一二〇、一二二―二三、一二五、一二七頁等。

(12) 「日本古代の耕地と農民」右同書、一五九頁、御膳八神、御歳神・高御魂神・庭高日神の大御食神・大宮女神・事代主神・阿須波神・波比伎神。

(13) 「神道の本」前掲書、五四頁。

(14) 近鉄ニュース二月号（一九九五年）② 古代史ゾーン「今よみがえる幻の斎宮」。

(15) 日本の神話」前掲書、一一六頁。

(16) 「日本古代の耕地と農民」前掲書、一六二―六六頁。「神道の本」前掲書、四四頁。

尚、Everyman's Encyclopaedia, Encyclopedia Britannica, Dictionary of World History 新英和大辞典等を随時参照した。